様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　22　年　5　月　14　日現在

研究種目：　基盤研究（B）
研究期間：　2007～2010
課題番号：19320120
研究課題名（和文）　歴史認識共有の実験～仏独共通歴史教科書の射程～

研究課題名（英文）　Toward a Shared Understanding of History: Franco-German Common History Textbook as a Innovative Experiment

研究代表者　剣持　久木（KENMOCHI HISAKI　）

研究者番号：60288503

研究代表者の専門分野：フランス現代史
科研費の分科・細目：　史学・西洋史
キーワード：西欧史　歴史教育　歴史認識　歴史教科書　共通教科書　歴史共同研究

１．研究計画の概要

2006 年秋にフランスとドイツの教育現場に導入された、史上はじめて「国境を越えた」同一内容の歴史教科書について、刊行に至る背景、内容、反応、教育現場での使用状況を調査、分析する。そして共通教科書の短期的な評価だけでなく、長期的な展望、つまり仏独やヨーロッパを越えた他地域とくに東アジアへの応用可能性も研究対象とする。

２．研究の進捗状況

まず仏独共通歴史教科書成立の歴史的背景として 1930 年代以来の仏独歴史対話の系譜を明らかにした。また、直接的な成立事情については、1990 年代の冷戦終結後いったん疎遠になった仏独が、イラク戦争を契機に再接近するなかで、共通教科書の直接的提案者となる青少年議会が開催された状況を解明した。

共通教科書の中身については、2006 年に刊行された第一巻（現代史）については「戦争の記憶」叙述、また 2008 年に刊行された第二巻（近代史）については、ナショナリズム叙述にそれぞれ注目し、当該時期を扱う既存の教科書と比較して分析した。また、教科書への反響については、メディアや専門家の反応だけでなく、ドイツ、フランスそれぞれについて複数の高授業を視察し、教員、生徒双方にアンケートを実施した。さらに共通教科書の関係者については、両国において執筆者、教科書を準備した専門家委員会のメンバーの大半と交流し、詳細なインヴューを実施している。とくに現場視察に際しては、フランス歴史地理教員協会やゲオルク・エッカート国際教科書研究所（ドイツ）等、両国間の歴史対話の中心的な組織と緊密な協力関係を築いている。さらに、共通教科書の他地域への射程については、東アジアや国際政治の専門家とも協力関係を構築して、内外で数回にわたってシンポジウムを実施し、その結果を既に公表している。最終年度の 2010 年度は、５月末に、共通教科書専門家委員会のメンバーのロルフ・ヴィッテンブローク博士を基調報告者に迎えて、日本西洋史学会で「ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程」と題する、総括的シンポジウムを主催する予定である。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

全体としては、当初の計画通り、ないしはそれ以上に進んでいると言っても過言ではない。ただ、自己評価に際しては、研究対象となる教科書自体の刊行側が当初の予定より遅れているため、こちらの研究が「足踏み」している状況も考慮する必要があろう。仏独共通教科書は、2006 年に第一巻が刊行された段階では、一年に一冊ずつ、３年で全三巻（高校３学年向け）の教科書が完結する見通しであり、本研究期間内に全て分析できる予定であった。ところが、第二巻が 2008 年にずれ込み、第三巻にいたっては 2010 年現在刊行の見通しが立っていない。こうした中でも、本研究チームは、研究の初期段階から、本邦における仏独共

通教科書研究の中心的存在として内外で認知されてきた。2007 年には東京ドイツ文化センターが企画した連続講演会に研究代表者の剣持が参加し、2008 年に日仏会館で開催された国際シンポジウム「欧州統合の半世紀と東アジア」には企画段階から、本研究チームが参加した。また、研究成果の公表もすでに仏独を含めた内外の研究機関、研究雑誌で行っている。

４．今後の研究の推進方策

共通教科書第三巻が、本研究期間中に刊行されるかは微妙であること、当初の予想に反して、共通教科書の使用現場が仏独いずれにおいても一部の高校にとどまっているという現状を踏まえて、共通教科書の展望については、短期的、つまり独仏あるいはヨーロッパレベルでは修正する必要がある。しかしながら、2010 年 1 月、3 月に相次いで歴史共同研究の報告書が公表された、日中、日韓の現状を鑑みれば、それでもヨーロッパの先進性は否定し難い。とくに、現在進行中のドイツ・ポーランド共通教科書構想は、1970 年代に始まる、独仏に次ぐ長さの歴史対話を背景としているだけに注目している。今後は、共通歴史教科書に限らず、共通歴史教材作りを行っている世界各地の状況にも目配りをして、東アジアについての短期的な悲観的展望を乗り越えた長期的な射程を視野に入れていきたい。具体的には、市民団体が実現した東アジア共通歴史教材『未来をひらく歴史』のスタッフや、政府間の歴史共同研究に参加している研究者とも連携し、歴史認識共有の可能性を長期的に展望して行く。と同時に、歴史教科書対話と歴史研究の関係、さらにはより広く文化交流における歴史対話の位置づけについても考察を深めていく必要があろう。この点についても、フランスとドイツは先駆的であり、興味深い事例を示している。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）

(1)　Akiyoshi NISHIYAMA, “Ein Ziel in weiter Ferne? Das gemeinsame deutsch-französische Geschichtsbuch aus japanischer Sicht”, *Revue d’Allemagne*, 査読有り、41-1, 2009, pp. 105-123.

(2)　剣持久木・西山暁義、「歴史認識共有の可能性～仏独共通歴史教科書の実験～」、『歴史学研究』、査読有り、840 号、2008 年、38-62 頁

〔学会発表〕（計　20 件）

(1)　西山暁義、「国境を越える教科書－独仏共通歴史教科書の内容と実践」、『国際シンポジウム「欧州統合半世紀と東アジア共同体」』、2008 年 4 月 18 日、日仏会館

（2）　川喜田敦子、「変容する地域秩序と歴史認識—ドイツとフランスの例から—」、『大阪大学世界言語研究センター国際シンポジウム「歴史における地域の形成」』、2007 年 11 月 27 日、大阪大学

〔図書〕（計　6 件）

(1)　剣持久木、小菅信子、リオネル・バビッチ、明石書店、『歴史認識共有の地平 —独仏共通教科書と日中韓の試み—』、2009 年、238 頁